

# (社) 東洋音楽学会 西日本支部 支部だより

Newsletter of the West Japan Chapter, Society for Research in Asiatic Music

第68号 (2011年1月20日)

## 定例研究会のご案内

東洋音楽学会西日本支部第251回定例研究会

日 時：2011年3月5日 (土) 午後1時半～4時半

場 所：京都教育大学 藤森キャンパス 音楽演奏室

JR奈良線藤森駅下車徒歩約3分、京阪本線墨染駅下車徒歩約7分

例会担当：田中 多佳子 (京都教育大学)

特別企画 「パンソリの魅力をさぐる」

1. 講演「私のパンソリ研究」 垣内 幸夫 (京都教育大学)

2. パンソリ実演と講話

安 聖民 (アン ソンミン)

鼓 手 文 主 継 (ムン チュゲ)

聞き手 垣内 幸夫

司 会：田中 多佳子

\* \* \* \* \*

## 定例研究会の記録

東洋音楽学会西日本支部 第248回定例研究会

日 時：2010年7月10日 (土) 午後2時～5時

場 所：京都市立芸術大学 L1 教室

例会担当：龍村 あや子

## 《研究発表》

### 旧満州で知りえた音楽・芸能情報 —— 日本語活字メディアを事例に 伸 万美子 (同志社女子大学)

#### 〈要旨〉

ロシアにより開発が進められていた「大連市」を、日露戦争後、南満州鉄道株式会社が「近代文明／文化」の装置を組み込んだ「文化都市」へと進展させていった。この大連を含む満州地域で刊行された多くの日本語の日刊・月刊新聞は、現地在住日本人に多くの文化関係の情報を提供した。報告者は祖父の日記に記された在留生活や謡の学習に関する記事に関心を持ち、その記録を補完していく関係資料の調査に着手し、本格的に分析を進めている。本発表では、『満州日日新聞』『大連新聞』などの日刊新聞および現地刊行の音楽専門新聞『満鮮謡曲界』（昭和8年創刊、流派を超えた月刊新聞）の記事を事例に、「音楽・芸能」関係の情報がどのように報道されたかについて、以下の六点の報告を中心に行った。

- ① 近代都市文明の象徴ともいえる「電車」開通にともなって登場したスポーツ施設、植物園、演芸館（活動写真の上映を含む）をもつ総合レジャーランド「電気遊園」（明治42年）に対する住民の期待とその施設そのものが西洋人観光客をもターゲットにしていたことが明確に報道されていたこと。
- ② 「歌舞伎座」が明治42年1月に大連広場に隣接した敷島町に開場し、舞台開きの様子が伝えられ、その後も『満州日日新聞』の「演芸欄」に上演情報が連載されていたこと。
- ③ 大正10年に中央公園に建築された能楽堂の老朽化に伴い、昭和10年に郊外に新築された能楽堂に関し、『満州日日新聞』『大連新聞』そして『満鮮謡曲界』に、新築に至る経緯、最大600名収容可能な観客席の設置、東京と同額の入場料が設定されたこと等が報道され、また宝生流宗家一行の公演内容、出演者など詳細な報道もなされ、このツアーは朝鮮半島の京城（ソウル）、満洲地域の新京（長春）、奉天（瀋陽）、遼陽、さらに青島、上海を回る大々的に挙行された戦前における能楽海外公演であったこと。
- ④ 能楽の教習についての情報は、『満鮮謡曲界』に、観世、宝生、喜多、梅若各流派の師範名、満州各地区の稽古場、曜日などが連載され、稽古を

希望する人の益に供されていたこと。内地での上演状況、能楽の解説などの記事は、師範及び謡などの教習経験のある能楽愛好者に供し、また初心者向けの「紙上能楽講義」の連載もされていたこと。

⑤ 昭和 10 年の 6 月歌舞伎（市村羽左衛門一行）、7 月文楽（竹本津太夫一行）、8 月（宝生流宗家一行）と続く移動公演の報道に関しては、すべて、「予告→チケット案内→上演状況」という流れで連載されていること。また前者 2 件については、日刊新聞に「慰問」という文言が大きく打ち出され報道されていたのに対し、宝生流宗家一行の公演は新京の公演のみ「慰問」であることが報道され、それ以外の地での公演は「芸術公演」として位置づけられていたこととの差異がみられた。

⑥ これら現地発行の新聞記事は、外地における邦楽受容のデータベースとなり、本報告での事例のように、文化政策の一面的な読み取りを見直す資料となり得ること。また外地コミュニティにおける能文化の形成の特性（中嶋謙昌氏の研究）をこれらの資料からも読み解くことができ、さらに内地／外地発行の両資料を複合的に、そしてジャンルを超えた研究者による共同調査の遂行が必須であること。

（仲 万美子 記）

### 〈報告〉

いわゆる旧満州は、近代日本音楽研究の中で最も取り扱いが難しい地域のひとつである。例えば満州国は、建国当初から国家として広く承認されていたとは言いがたく、ひとまず国と認めても、存続したのは 20 世紀前半のほんの束の間に過ぎない一方で、日本と極めて密接な関係を持っていた。

発表者の研究は、この地域で展開された音楽文化に着目し、日系住民が日本伝統音楽をどのように受け止めていたのかということをも明らかにする試みである。本発表では、特に当地における能楽の営みに焦点をあて、住民が活字資料からどのような情報を得ていたのかということに関する報告が行われた。

研究の動機が簡単に語られた後、大連電気遊園の紹介が行われた。パワーポイントを駆使し、住民の憩いの場であり、映画館などの娯楽設備があることが指摘された。次いで、同時期に開場した「歌舞伎座」に関する簡

単な言及があった。そして発表は大連における能楽の状況に移っていった。主に取り上げられたのは昭和10年に建造された能楽堂とその初演にかかわる宝生流宗家一行の興行である。当地で発行されていた新聞や雑誌を材料に、それぞれどのように報道され、当時の人々がどのような情報を受け取ったのかということが示された。また、紙上で行われた能楽の手ほどきに関する記事の紹介もあった。そしてまとめでは、新聞記事のデータベース化によって従来の邦楽研究を補完する可能性や、他の都市における洋楽受容の状況と比較研究する試みが言及された。

質疑応答では、まず『満鮮謡曲界』の発行部数と、言及された新聞の編集方針の違いが問題になった。それから満州で発行された新聞資料の調査を評価するコメントがあり、また、外地で日本伝統音楽を習う意味について問う質問もあった。「満州」という言葉の表記法および満州国の位置づけに関する質問もあったが、多くの人々にとってあまり馴染みの無い地域であり、例えば昭和10年の人口、面積、民族、言語、宗教などの基礎データの紹介があればよかったかもしれない。研究方法に関する質疑応答も行われた。様々な社会・文化的背景を持つ中国大陸の大都市における音楽文化の在り方をどのように横断的に理解するのか、受容の問題を考える際に音楽ジャンルの問題をどのように取り扱うのか等々。データの報告に比して研究方法についての言及が少なめだったのではないだろうか。その他、フロアから同時期の朝鮮の日本人町における音楽・芸能文化の状況の紹介もあった。  
(上野 正章 記)

## 《特別セッション》 沖縄と東アジアの戦中・戦後の社会とメディアをめぐって

### (1) 修士論文発表

アメリカ占領下の沖縄における『民謡』と社会活動：1945-1972

照屋 夏樹 (京都市立芸術大学)

### (2) 招待発表

「電波戦争」の発進基地としての沖縄——米国による心理戦とプロパガンダ・ラジオ

小林 聡明 (東京大学／ソウル大学)

### (3) コメントと全体討論

コメンテーター：久万田 晋 (沖縄県立芸術大学)

〈報告〉

今回の「特別セッション」は、「沖縄と東アジアの戦中、戦後の社会とメディアをめぐって」と題され、龍村あや子氏によって企画された。二つの発表とそれらに対するコメントという組み合わせである。

まず、照屋夏樹氏の発表は、アメリカ占領下における沖縄「民謡」、とくに「新作民謡」とよばれる『PW 無情 (Prisoner of War) 無情』と『時代の流れ』の 2 曲に焦点をあて、民謡が時代（敗戦後の収容所時期、アメリカ世（占領期）など）をなまなましく映し出していること、さらには民謡が沖縄の本土復帰運動をはじめとする社会運動のなかで一定の役割をはたしてきたことが指摘された。敗戦後から 1972 年の本土復帰まで続いたアメリカ占領下にあつて、こういった「新作民謡」は民謡＝自然発生的に生まれた音楽、という側面をもちつつも、レコード化され、ラジオ放送などでひろく享受されてきた側面をもつ。そういった民謡を、本土への返還運動やその後の平和、反戦運動に活用することで民謡そのものが新たな社会的、文化的文脈を獲得していったことが、資料や音源を用いて示された。

これに対して、沖縄において「新作民謡」というものが、なかなか本土の「民謡」概念からは理解しづらいものであるという点がコメンテーターの久万田氏から指摘された。つまり、今回の発表で扱われた 2 曲も創作された経緯は「民謡的」であるのに、その伝播となるときわめて「商業的な性質」を帯びることになる、その点こそが沖縄独自の民謡のあり方であるとの久万田氏の補足発言によって、照屋氏の発表がひじょうに理解しやすくなったと感じた。

つづく小林聡明氏の発表は、これまであまり公にはされてこなかった「米国プロパガンダ・ラジオ」の実態を明らかにしようとする意欲に満ちた発表であった。占領下の沖縄には米国が保有するラジオ局が存在したが、なかでも「極東放送 (FEBC)」は、表向きは民間の宗教放送だが、内実は軍部に近い性質をもつ反共放送の牙城であった、というのが発表者の主張である。すなわち沖縄を舞台として「東アジアの電波戦争」が繰り広げられるなか、極東放送は米軍により一定の役割を期待され、それゆえに、沖縄返還の際にこのラジオ放送権にこだわる米側の思惑が核問題のかけにかくされてきた、というのである。ラジオとは戦中、戦後にかけて、きわめ

て重要なメディアであり政治利用がなされやすい媒体であった。小林氏がのべたように、権力者と「音声をもつ力」の関係について考える際、ラジオ放送は今後も、学際的研究が期待される分野である。しかしながら、「音声」という痕跡を残さない対象を調べる限界についてもフロアーからの質疑のなかで話題になった。極東放送が具体的にどのような言説を放送で流していたのかについては今後の課題として残されている。

今回の特別セッションはつい先日まで連日、報道をにぎわしていた（本土では過去形となる）沖縄の終わらない戦後、米軍基地とそれに付随する諸問題に密接に関わるものであり、かつ、政治問題からみれば周縁的な存在とみなされやすい音楽や放送が実は文化状況、政治状況を左右する鍵となりうることを示唆するセッションでもあった。

(井口 淳子 記)

\* \* \* \* \*

東洋音楽学会西日本支部 第249回定例研究会

日 時：2010年7月31日（土） 午後1時～4時半

場 所：国立民族学博物館 第6セミナー室

例会担当：福岡 正太

### 《修士論文発表》

#### (1) 大阪府下における「ふとん太鼓」の分布と特徴

柏 祐香子 (大阪芸術大学)

#### 〈要旨〉

本論文は、大阪府下で現在ふとん太鼓を用いた祭りを行っている神社とその氏子地域を対象に、ふとん太鼓の役割や、造形的・音楽的特徴を明らかにするものである。

ふとん太鼓とは、神輿のように人が担ぐ山車的一种で、その最大の特徴は、屋根にあたる部分に、正方形の巨大な「座布団」を逆ピラミッド型に積んでいることである。屋根の下の空間には、鋏留両面太鼓が一つ固定され、乗り子と呼ばれる人々が一定のリズムをたたく。また、地域によって

は担ぐ際に囃子唄をうたう。

ふとん太鼓に関する文献資料は、自費出版のものが多く、その内容は各地域のふとん太鼓についての歴史や造形的特徴の記述に偏っている。また、対象となる地域は限定的で、大阪府下全域を対象に調査したものはない。そのため、本論では大阪府下全域を対象に、音楽的観点も含めて、平成 17～21 年のフィールドワークを基に考察を行った。

本論の構成は序章、第 1 章、第 2 章、第 3 章、結論からなっている。第 1 章と第 2 章ではふとん太鼓の概要から現在の分布や祭りの状況まで、音楽的特徴以外をまとめ、第 3 章では掛け声、太鼓のリズム、囃子唄の音楽的要素について筆者が作成した五線採譜を基に分析するとともに、それらの特徴を明らかにした。

以上のことから、大阪府下のふとん太鼓は江戸時代から造形的に大きな変化はなく、囃子唄をうたうのは泉州地域に集中しているといった諸特徴をまとめ、本論の結びとした。

(柏 祐香子 記)

### 〈報告〉

本発表の趣旨は、現在大阪府下でふとん太鼓を用いた祭りを行っている神社やその氏子地域を対象に、ふとん太鼓の祭りにおける役割や、造形的・音楽的特徴を明らかにすることです。

アンケートとフィールドワークによりふとん太鼓の祭りの特徴を音楽的要素以外の特徴と音楽的特徴とを報告されました。ふとん太鼓は、神輿のように人が担ぐ山車的一种で、その最大の特徴は、屋根にあたる部分に「ふとん」と呼ばれる正方形の巨大な座布団を逆ピラミッド型に積んでいることです。屋根の下の空間には、鋤留両面太鼓が一つ固定され、乗り子と呼ばれる人々が一定のリズムをたたく。また、地域によっては担ぐ際に囃子唄をうたうところもあります。音楽的要素以外の特徴は、①呼称は「ふとん太鼓」「太鼓台」。祭り時期は 5 月初旬、7 月～10 月で管理運営は氏子地域。②分布は大阪湾沿岸や淀川・大和川などの河川沿い、河内平野に集中。③ふとん屋根は平型屋根に朱色、三段か五段。④型は淡路型・堺型・貝塚型・大阪型・折衷型の五種類で淡路型が最も多い。⑤江戸時代後期頃

と現行の造形的な変化は、あまり見られない⑥祭りでの役割は、賑やかしの傾向が強いが、一部では神輿の露払いとして用いている。⑦人手と資金不足。⑧祭りの日程を土日に合わせるところが増加。⑧担がずに、引くところが増加。音楽的特徴 (1) 掛け声は①「ベラ」系 (泉州の全域、大阪市、枚方の一部) 囃子唄を唄う地域は泉州地域に集中 例 ベーラ ベーラ ベラショッショイ ②「チョーサ」系 例 チョーサジャ チョーサジャ の二種類あります。(2) 太鼓のリズム 44ヶ所 (参加氏子地域 102ヶ所) で 11種類に分類、(四分音符は 4 と八分音符は 8 と四分休符は休と表記します。大阪府全域に分布、①約 4 割 (大阪市、枚方市、東大阪市、堺市) 譜例①488 488 444 88 ②約 3 割 (茨木市、豊中市、吹田市、東大阪市、八尾市、柏原市、藤井寺市、堺市) 譜例 ②884 884 884 44 ③局部的に分布 譜例 444 休 444 休 (3) 囃子唄の歌詞は第一分類とし①しりとり式 歌詞の最後の文字を次の唄の頭に同じ文字からはじめる。②非しりとり式の二種類あり第二分類として (ア) 摂河泉タイプ (イ) 市タイプ (ウ) 神社タイプ (エ) 一つの氏子地域タイプの 4 種類あります。私は、「だんじり」「ふとん太鼓」「神輿」と祭りをしてきましたが、ふとん太鼓のリズムがだんじりの曳行中に囃すリズム「道中」と同じリズムが約 4 割、1 拍ずらせば同じリズムが約 3 割あるのには、びっくりさせられました。これは元は、同じリズムであったと思われます。私も「道中」のリズムを教えられた時は、チューサジェ系のリズム体系「チキチン チキチン チキチン コンコン」と教えられましたが、演奏実態は、「チンチキ チンチキ チンコンコン チキ」なのですが、口承するのには前者の方が都合が良かったからだと思います。大阪府内全域を調べたことはないのですが、8月のお地蔵さんの時に鉦が置いてあり地域によれば「道中」を演奏していたところもありました。学会の後日に人形浄瑠璃の夏祭浪速鑑を見る機会がありそこでは、チョーサジャ系のリズム体系で演奏されていました。ふとん太鼓のリズムの 7 割以上が同じリズムなのは、だんじり囃子、お地蔵さん、夏祭浪速鑑がなんらかの影響を与えたのかもしれないと思っています。

(丸田 弘治 記)



## (2) 囃し田の「芸能化」 —— 伝統習俗から演じられる「芸能」へ 松井 今日子 (神戸大学)

〈報告〉

観光地でミニ・ショーとして演じられたり、文化財として伝承・保護が義務づけられているような民俗芸能に対して、それらは本来あるべき状態から変化を蒙っている(発表者のいう「芸能化」している)とすれば、それはどのような過程を経ているのか? このような疑問はすでに一般にも広く共有されつつあるが、これに対して発表者は、失われた伝統にノスタルジックになるのではなく、担い手による伝統の生き残り戦略を正当化するのでもなく、資料と観察を駆使して淡々と取り組んでいる。

囃し田はもともと「労働の促進、田の神信仰、権力者の権威の誇示の場、男女の出会いの場」という機能をもっていたが(配布資料より)、近代日本においては卑猥・低俗なものと評価を下されたため衰微しつつあった、という。ところが1920年代後半の舞台出演をきっかけに、担い手は演者としてのアイデンティティを確立し、それ以降は地域間の対抗意識の過熱する競演大会を通じて、実際の田植えからかけ離れた演出を獲得していった、とされる。こうした過程を、歌や振付の変化と関係づけながら具体的に明らかにしていくのだが、その情報量に圧倒された。

ところで、芸能とは不思議な語である。発表者のいう「芸能化」とは、「本来の伝承脈絡である「民俗」から離脱し、新たに「観客」を想定した「観る／観られる」の二項的関係を創出し、舞台上の「芸能」として演じられるようになること」(配布資料より)とされている。しかし考えてみると、囃し田はもとより「民俗芸能」、つまり「芸能」という語を含んでいる。語の問題だけでなく、内容に関しても、たとえば神や農業従事者について囃し／囃される、富や権力の顕示による支配／被支配、男／女の性的関心など「観る／観られる」二項的関係をふんだんに含んでいたであろう。

とするならば、囃し田は近代に「芸能化」したというよりも、過去から現在まで芸能であることを保ちながら、芸能の内実が変化してきたということができないのではないか。実際、「芸能」という語をめぐる質疑応答が活発に交わされた。たとえば「観る／観られる」という二項的関係を成り立たせている行為者とは誰だったのか、それらの交わったところら

のようなパフォーマンスがあらわれたのか、さらにいえばそのパフォーマンスにおいて音や踊りはどのような位置づけとなったのか。芸能の概念をうまく用いて整理するならば、より興味深い調査研究になるように思われた。

(今田 健太郎 記)

## 《研究発表》

### 常磐津節の五十音図にみる音声表現と「ねいろ」の特徴 —— 能・浄瑠璃の五十音図と比較して 龍城 千与枝 (京都市立芸術大学)

#### 〈報告〉

私たちは、日本語の音（おん）を構成する五十音のひとつひとつを発するという身体動作を、どのように分節（アーティキュレーション）し、言語化しているのだろうか？ 発表者のとりあげる常磐津節をはじめ、能や浄瑠璃など語り口を伝承している芸能においては、一般にはおそらく意識さえされないこの問題について、繰り返し論じられてきたようである。なかでも「五十音図」がさまざまな芸論に登場することを知った発表者は、これを手がかりに常磐津節の芸態の特徴を明らかにしようとする。

五十音図というものは、「あいうえお、かきくけこ……」などと日本語の音の羅列にみえる（学校教育ではそこまでしか示されない）。芸論に登場するものは、見かけはほとんど同じながら、それぞれの音がどのように発音されるかを、発音に使われる身体部位（喉、舌、唇、前歯、牙＝奥歯、鼻、顎）を横軸に、顎の開閉（開合）を縦軸にとった表にして示されて、身体の部位と動作によって整理されているのである。この点について、近代に捨象された身体性などとして面白がることができるかもしれない。

さらに詳しくみると、五十音図とそれについての細部の記述が、芸論によって微妙に異なっている。そうした相違を比較・検討することにより、常磐津節の発音の特徴として、鼻にかけないこと、濁らない音を好むこと、母音を重視することなどを挙げる。また芸術的志向性として、金剛流の能の謡の影響を受けている可能性と、歌詞を韻文としてとらえる傾向などを指摘した。

パフォーマンスを論じる方法として、日本語の「音（おん）」の発音という着眼点とそれを表にした五十音図という資料を見いだした点で、非常に触発される発表であった。ただ学術性において問題となる点はある。たとえば、五十音図という音と聞き取られる「ねいろ」は、（発表者によればその関係はゆるいというが）対応関係にあるとされるが、実際の検証が難しく、論の前提とするかぎり議論を免れないだろう。実は発表者自身は常磐津節の演者であり、五十音図のさまざまな発音を自身の身体でもって検証できるようなのだ。その手段をもたない人にも理解できるよう、できるかぎり対象の用語から離れて記述することも必要だと思われた。

(今田 健太郎 記)

## 《展示見学》

### 国立民族学博物館の新音楽展示 福岡 正太（国立民族学博物館）

#### 〈報告〉

2010年3月にリニューアルオープンした国立民族学博物館の新音楽展示は、天井に備えつけられた高指向性スピーカーや展示場のいたるところに設置されているビデオ映像から、様々な音が流れる空間となっている。同館の音楽展示は、これまで単に楽器を展示するという性格であったが、新音楽展示ではその楽器からどんな音が出るのか、どういう脈絡で演奏されるのかといった、「音楽をとらえる」という視点で構成されている。その役割を果たすのが、30台を超える映像モニターである。ビデオ映像は、楽器をみるだけでは伝わらない楽器から発せられる音を知る手がかりとなる。これらのビデオ映像は、新展示を公開するにあたって新たに収集された映像が多く、他ではみることのできない貴重なものも含まれている。また、以前はアジアを中心とした展示となっていたが、視野を世界に広げた通文化展示となった。

新音楽展示の主要な楽器は、「太鼓」、「ゴング」、「チャルメラ」、「ギター」の4種である。これらの楽器は、人と音のつながりを密接にあらわす例であり、今回の見学の案内役である福岡正太氏は、新音楽展示をみることによって来館者に「人間にとって音、音楽とはどういう意味をも

つか」を考えるきっかけにしてほしいと述べる。それは、音や音楽で溢れる現代の日本において、音楽が生活や文化のなかで本来どのような役割であるかを考えることが重要であるという。そして今回の新音楽展示では、歴史の中での音楽の展開という点にも着目し、現在の音楽を考える工夫がなされている。とくにギター展示においては、世界に広がるギターをとりあげ、日本におけるギターの受容を、歌謡曲や演歌といった映像、レコードとともに提示している。そこからは、世界各地に広がりを見せたギターが、様々な影響を受けて各地域に取り入れられ発展した姿をみることができ、展示の最後には、音楽に携わる方々のインタビュー映像を映し、人と音、音楽のかかわりを知ると同時に、あなたにとっての音楽とは何かを来館者に問いかけている。

(出口 実紀 記)

\* \* \* \* \*

■西日本支部の委員が交替しました（任期は2010年10月より二年間）

理 事：寺内 直子（西日本支部長）、竹内 有一（経理）

委 員：今田 健太郎（支部だより）、上野 正章（ホームページ）、  
北見 真智子（例会）、志村 哲（支部だより）、田中 多佳子（例会）、  
寺田 吉孝（例会）

参 事：梶丸 岳、金 銀周、藺田 郁、田 鋤 智志、龍城 千与枝、田村  
菜々子、出口 実紀、米山 知子

■西日本支部の事務局が変わりました。

西日本支部定例研究会での研究発表を希望される方は、発表種別（研究  
発表・報告等）、発表題目、要旨（800字以内）、氏名、所属機関、連絡  
先（住所、電話、FAX、E-mail）を明記の上、下記の西日本支部事務局  
までお申し込みください。

（社）東洋音楽学会 西日本支部事務局  
〒657-8501 神戸市灘区鶴甲 1-2-1  
神戸大学国際文化学研究科 寺内研究室気付  
TEL：078-803-7454 E-mail：naokotk@kobe-u.ac.jp

■入会申し込み・住所変更について

（社）東洋音楽学会への入会をご希望の方は、80円切手を同封し、下記  
の学会事務所へ入会案内・申込用紙をご請求ください。申込用紙は、ホ  
ームページからもダウンロードできます。会員の異動や住所変更等につ

いても、下記の学会事務所へお知らせください（申し出先は支部事務局ではありませんのでご注意ください）。

社団法人 東洋音楽学会 学会事務所  
〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号室  
TEL: 03-3832-5152 FAX: 03-3832-5152  
ホームページ: <http://wwwsoc.nii.ac.jp/tog>

## ■お詫び

第249回定例研究会の記録において、松井今日子氏と龍城千与枝氏の発表者本人による要旨を、お二人に請求するのを失念しておりました。報告のなかに要約を含んでいるので、それに代えさせていただくことにいたします。関係者にはお詫びいたします。

---

## 支部だより 第68号

発行: (社) 東洋音楽学会西日本支部 今田 健太郎・志村 哲  
〒657-8501 神戸市灘区鶴甲1-2-1  
神戸大学国際文化学研究科 寺内研究室気付  
TEL: 078-803-7454 E-mail: [naokotk@kobe-u.ac.jp](mailto:naokotk@kobe-u.ac.jp)